大正十三年十一月廿二日第三種郵便物認可（毎月一回一日發行）
大正十四年十二月三十日印刷納本　大正十五年一月一日發行

婦人運動

十五年

職業婦人社發行

一月號

年頭雜記　奥むめお

年があらたまるといふことは、何となしに新しい氣分を與へてくれて快よく緊張するものであります。この一年三百六十五日ずつと、此の元日の朝のやうな緊張味をもちつゞけて生きてゆきたい希望が切であります。

何となく今年はよいことある如し
元日のあさはれて風なし　（啄木）

實にしづかな、中庸な元旦の歌ではありませんか。

働けど、はたらけどなほわが暮しらくにならざりぢつと手を見る

わが抱く思想はすべて貧乏に淫する如し秋の風吹く

貧しいものゝ心をうたつて、よくわたし達の悲しみと憤りとを慰め、力と誇りとを與へてくれるわが啄木の歌の中から、かういふなごやかな新年の歌をひろひ得て、喜びは一層胸に沁み入るやうであります。

× ×

然しながら、ひるがへつて私たちの生活を思ふ時、何と長い間隠忍屈辱のみぢめな生活に首うなだれて來たことでせう。

ごらんなさい。夜は明けました。東天に出さすあの陽の輝きを仰ぎみて下さい。

家庭に、野良に、オッフキスに、工場に、營々として働きつゞけて來て、而もその働きが何ら社會的に認められて來ないでゐたわれら無產階級者の鬪ひが、一つまた一つと勝ちを制しつゝ、徐むろにあるべからざる地位から當然にあるべき正當の地位にまで上らうとしてゐることは、おほふ事の出來ない事實であります。

× ×

この正月號の雜誌が（改造、中央公論婦人公論、婦女界、主婦の友其の他大雜誌はみな）東京の印刷所の、職工二千名が、最低賃銀制定、待遇改善、その他五ケ條の要求を持ち出してふみつけにされたのを怒つて結束してストライキを初めたゝめに、いつまでも出來上らずに、いつもよりは十日以上もおそく店頭に並べられたことは、讀書階級——無產知識階級に一大ショックを與へました。職工らが結束してたゝかひつゞけたゝめに——押しつまるあの不景氣な暮れにもかゝはらず戰つて要求條項は美事に貫徹したのであります。

× ×

この大きな教訓を藏して店頭に並んだ新年號の諸雜誌を手にするに際して、自分たちは無產者解放のみちは、唯一つしかないことを一層強く思はされるのであります。

私たちの仲間のある者は、家庭奴隷としてのむさ苦しい忙しさにあまりに長く追ひまわされすぎて來ました。又、ある仲間は、月給奴隷、賃銀奴隷として屈辱な勞役にあまりに長く搾取されて來すぎました。

こゝに新しい年を迎へるにあたつて、各自、しづかに自分達の生活をかへり見思ふて、すゝむべき方向を見究めて第一歩から確りとした足どりで大地をふみしめませう。

× ×

婦人運動

一月號

無產政黨の禁止に際會して

安部磯雄

昨年の第五十議會で、普通選擧法が愈々實施されることにきまつてから、無產政黨組織の機運が熟して、急に無產階級者の政治運動が活氣づいて來た。そして、長い長い產みの苦しみを經たのち農民勞働黨といふ名稱でうぶ聲をあげたのが十二月一日、これに走せさんじた勞働團体が三十五、含むところの總人數は十四萬二千人と傳へられるのであつた。而も、全國から來集した各代表者數百人に依つて盛大に結黨式が行はれてのち僅か三時間で、この農民勞働黨は、治安警察法第八條に依つて結黨禁止の畢命をうけ粉みじんにされてしまつたのである。

そもそも無產政黨とはどんなものであるか。

無產政黨とは、存立することを許しえないほど危險、過激なものであるのだろうか。

？？？

安部磯雄氏は、禁止に就て、『まことに遺憾なことである。無產者の政黨組織が、現代社會の一つの安全辨であるが、かういふ結果になると、自然無產者の不平は他に向つて鋭なものになりはしないかと心配だ』と云つてゐられる。次ぎの一文は無產黨に對する社會の誤解をとくのに非常に結構と思ふゆえ、婦人の友よりその要點を輯錄する因みに、もつと溫健な立場から、無產黨の再起が企られてゐる。

一口に『無產政黨』と言へば、『無產』が『貧乏』と同一語であるかのやうに解されて、中產階

級の人や知識階級の人々には親しみがなく感ぜられて、その仲間入ができにくいやうな氣がしないでもありません。勿論、今度現はれて直ぐ解散せしめられた無產政黨は決してそのまゝの名目をつけず、農民勞働黨と稱しました。しかしいづれにしろこの政黨の出現については世間にいろいろの誤解を招き、その成立の正しい意味が理解されてゐないやうに思はれますので、私は茲にその意味を説明してみたいと思ひます。

世間の人々の中には無產者、有產者と云ふ言葉を無雜作につかつてゐる人が多いやうでありますが、その人達は一體どういふ意味にそれを理解してゐるのでありませう。隨分誤解してゐるのではないかと考へられる場合が數多くあります。私の考へによれば、無產とは決して貧乏の意味ではありません。私の理解による無產者とは、その人の得てゐる收入の大部分が、筋肉勞働及び頭腦勞働を含めて、その人の直接の勞働によつて來たるもの、即ち財產の力に依つて衣食せず、自分で働いて自分の生活費を得るものを言ふのであります。假令その人が少しの貯金をもち、住宅或は住宅地を所有して居つたとしても、その收入の大部分がその人の勞働から得られたものである限りは等しく無產者と稱するのであります。從つて有產者はその反對になります。即ち收入の大部分が、少しも勞働せぬ者は勿論幾分か頭腦勞働をする人をも含めてその人の所有する財產から生じ得る場合を言ふのであります。この區別は私の勝手に作つたものではなく、實際問題として實に重要な意味を含んでゐるのであります。

その人の收入の大部分が、その人の直接の勞働によつて得られてゐる人は、その人の生きて働いて居る間は生活に不安がないが、もしその人が死んだ場合には、その人の家族の生活に直ちに影響

します。假に幾らかの貯へがあつたとしてもそれはたかだか二三年を支へ得るに過ぎず、況んや子女の教育などといふことは到底できません。これに反して有産者は、財産によつて生活ができますから假に主人が死んだとしても一家の生活は少しも脅かされず、依然前と同様の生活を持續することができます。そこで人間の生活は財産の有と無によつて實に非常な差違を生じてくるのであります。

○

人間がこの世に生れて來た以上、その人間にとつて最も大切なことは生活の安定といふことであります。生活の不安定こそ人間のもつ最も大なる苦痛であります。然るに今この世の中に生活の安定を確實に得てゐる人がどれほどありませう。イギリスで調べた統計によれば、イギリスでは人口の一割が有産者であつて、生活の安定を得て居りその九割は無産者であつて、生活の不安定の狀態に居ります。しかも人口の一割にしか當らぬ有産者の所有して居る富は、實にイギリスの富の九割を占めて居るのであります。日本ではまだかうした統計が現はれて居りませぬから、正確のことは言へませぬが他の方面から推測すると、イギリスとほゞ同様の狀態にあるといふことができます。

これは日本の教育の狀態から推測するのであります。日本の小學校は義務教育となつて居りますから、苟も日本人である限り全部その教育を受けるわけでありますが、それ以上の中學、高等學校專門學校、大學の教育を受ける者に至つては實に僅かな程度であります。今、日本人の中で十四歳から二十四五歳の年齢の青年男女を調べて見ると大體一千萬人になります。そしてこれが中、女學校以上の高等教育を受ける年齢になるのでありますが、實際その教育を受けて居る子女は多く見て

五十萬或は六十萬に過ぎません。一千萬人の中五十萬人即ち百人中五六人の青年男女が辛うじて高等教育を受けるのであつて、他の大部分は無教育のまゝに社會に出るのであります。これは實に驚くべきことであり、悲しむべきことであります。

有産階級の者でその子女を中學或は女學校へ入れないといふ例外がないではありませんが、大體目下の日本の現狀から考へるなれば、生活の餘裕あるものゝ子女にして高等教育を受けない子女はないと言ふことができます。然るにその高等教育を受ける子女が日本の人口の一割にも足らない狀態であるのを見ると、他の九割以上は無産者の子女であるといふことができます。即ち日本の有産者と無産者との割合はイギリスと同樣或はより以上相離れた比率をもつことになります。

○

人間が自ら怠惰であつて貧乏するのは自業自得で自ら責むるの外ありませんが、今日の世の中では實際仕事をしようとしてもすべき仕事が見當らない場合が多いのであります。筋肉勞働者にして失業者たる者が東京は勿論、日本全國にわたつて實に多數に上つて居ります。働きたくとも働く仕事がないといふ人の數は無數であります。しかもこれは知識階級にも同樣であります。然るに社會の缺陷はここから起ります。竊盜、詐欺の類頻發し、婦人にして醜業婦となる者皆この生活不安の現狀から由來して居るのであります。

生活の安定を得て居る者が全人口の一割に過ぎず、他の九割以上が不安定者であるとすると、社會的弊害續出して、政治が昔の樣に役人が人民を治めるといふやうな概念の下に施行されることは非常に困難となつて來ます。一國の役人は謂はゞ一家の親のやうなもので、その子供の困らぬやうに世話をしてやらねばなりません。然るに十人の

中一人だけ良い境遇に置かれ、他の九人は悪い境遇に置かれたとすると、親たる者はその子供たちを平等にすぐ良い境遇に置いてやらねばなりませぬが、一家族と違ひ一國では何十萬の人々の面倒を見なければならぬことになりますから、役人に於てもなかなか手が廻りかねます。何千萬人の生活を保證するにはまた隨分金がいります。その金がなかなかできません。それで今日までそのまゝに放つて置かれたのであります今の日本はこの役人の助けを借りようと思ふとそれが何時までかゝるかわからぬ狀態に在るのであります。

○

自分のことは自分でやる。かういふ希望の下に無產者はまづ普通選擧を要求しました。自分が選擧權をもち、自分の利害を代表する代議士を選び、國家の行政に對して自分の意見を代表せしめる。從來の政治は一割の有產階級の利益を代表して、他の大部分の九割の無產者の意志は無視されて居つた。そこで自分等の代表者を選んで議會に送り自分等の利益を要求してまづ自分らの生活の安定を得るやうな方法を講じたい。かういふ希望の下に普通選擧が要求され、實施されることになつたのであります。それで今度の總選擧には全人口の九割を代表する我々の代議士を議會に送りたいがまだ大多數の人は政治的の訓練を經て居りませぬそれでいざといふ時に誰を代表者として送つていゝかわからぬ場合が起るとも限りません。そこでそれらの人達を結合せしめる政黨をまづ作つて置いて、必要の時に善處し得るやうにしたい。これが無產政黨を組織しやうとする動機であり、理由であります。

○

普通選擧が實施されるやうになつたので、選擧權を持つ者が非常に增加しました。今、全國に於

てこれを持つ者千三百萬人と數へられて居りますが、その有産、無産を區別しますと、やはり一割と九割との關係になります。若し九割の選擧權をもつた無産者が政黨を組織し、その代表者を議會へ完全に送ることができるとすれば、それは非常な勢力となります。議員の全體が四百六十名として、その九割卽ち四百人を議會に送り國政に參與せしめることができるとすれば、無産者の生活は第一に安定されることができます。勿論贅澤をして遊んで暮らすといふことはできませぬ。否、それは極力批難すべきことであります。それで苟も人間として生れてきて、普通に働いて普通に食へるやうになることを中心に考へて、それを平等に得させやうとするのであります。

　かういふ目的のために無産政黨が成立されんとしたのであります。假令此度の政黨が解散されたとしても、それは日本國民の大多數が必ず要求すべきものであり、而して大多數の生活の不安を必づ安定せしめるものである限りに於て、直ちに再び組織さるべく努力しなければならぬものであることは言を俟ちません。世間には勞働者が政黨を組織することは危險であると考へる人がありますが、それは飛んでもない誤つた考へであります。たゞ人間として生きてゐる以上、安全に生活し得る方法を求めるに何の危險性がありませう。寧ろ生活不安こそ一つの危險思想に導くものであつて、人間はその生活の安定を得た場合決して危險な考へを起すものではありません。世界で最も健全な國民をもつ國は、イギリスであると誰も考へますしかも世界で一番勞働黨の發達してゐる國は又イギリスであります。無産政黨の組織は決して少しも危險性を帶びたものではないのであります。

無産政黨と婦人の要求

山川菊榮

婦人には特殊の要求がある

いよいよ無産政黨が生れでるに就いて發表せられた各團体の行動綱領――すなはち、さしあたりの抗爭項目を見て、すぐに感ぜられたことは、婦人に關する問題が何ほども揭げられてないといふもの足りなさである。いふまでもなく婦人の中には有産階級のものもあり、無産階級のものもありて、婦人はみんな無産階級に屬してゐるといふわけではない、けれども、政治的、社會的に男子と平等な權利を與へられてゐないといふ點では、どの階級に屬する婦人にも共通の婦人獨特の問題があり、從つて、婦人獨特の要求があるのである。各團体の行動綱領の中から直接婦人に關係のふかいものを取上るならば、次の三つに盡きてゐる。

一、滿十八才以上の男女の無制限選擧權

二、少年及び婦人の殘業、夜業及び危險作業の禁止

三、分娩前八週間、分娩后八週間の休養及びその期間の賃銀全額支拂

もちろん、この外の條項がすべて婦人には關係がないといふのではなく、一般無産階級の利益を

代表してゐる限りに於て、どれもみな當然婦人の利益をも含んでゐるのではあるが、現在のやうな社會で、婦人だけが、特別に受けてゐるところのいろんな直接の利害に就いて、もつと書加へる必要があると思ふのである。

たとえば、（各團体婦人部から提案せられた修正案による）

二、要求すべき項目

一、戸主權を撤廢すること

二、結婚してゐる者としてゐないものとの別なく女子を無能力者扱ひにする法律を一切撤廢すること、婚姻及び離婚の場合に、男子と女子との權利義務を同等にすること

三、すべての教育機關および職業に對して、女子の（並びに殖民地民族の）權利を男子と（内地の）同等にすること

四、少く共、標準生活をするに必要なだけの賃銀を支拂ふこと（民族を問はず、性別を問はず）

五、あらゆる職業に於て、男女に共通の俸給の原則を立てること（殖民地民族の場合にも）

六、乳呑み兒を有する勞働婦人や職業婦人のために、休憩室を設け、三時間ごとに三十分以上の休憩時間を與へること

七、結婚、姙娠、分娩のために婦人を解雇したりすることを禁ずること

八、公娼制度を撤廢すること

三　封建的家族制度に反對

『戸主制度の撤廢』

『わが國特有の家族制度』といふ老人たちが好んで用ひるこの家族制度といふものは、われわれ

大和民族の祖先があま降つて來た昔からあつたのでないことは、歴史をしらべればすぐに分ることで、鎌倉時代の後、武士が自分の家の子郎黨を統卒してゆく上の必要から、長子に相續の法を始めて女子から財産相續の權利を奪つてしまひ、家督を相續するにあたつて、血統の純潔を保たせるために女に對して實に苛酷な貞操の觀念をつくりあげ、家督相續人たる武士のわすれがたみを保護し監督させる必要上、夫から再婚の權利を奪ひとつてしまふ事いろんなふうに『家』といふもののために女子を全く道具にしてしまつた事から初まつたのである。そしてこの、武士階級の必要が作つた家族制度が、當時武士以外のあらゆる階級の婦人の地位をも決定してしまつて、前例のない婦人の地位を――家とか、家系とかの犧牲になつた全く屈辱とれい屬だけの生活を女子に強いるやうになつてしまつたのである。

これは、一切の封建時代の遺風と一しよに一日も早く撤廢してしまふべきものである。

『女子を法律上の無能力者とする一切の法律を撤廢すること、婚姻、離婚の場合に、男子と女子との權利義務を全く平等にすること』

これも前項と同じ理由から來る要求で、既婚婦人を法律上に無能力者扱ひにし、婚姻及び離婚に際しての男子と女子との地位を不平等にしてゐる現行の法律は、その精神に於て、女子を男子にれい屬させ、女子を男子の私有物扱ひにしてゐるものであるから、封建的家族制度の殘存物として、一掃しなければならぬのである。

四、封建的家族制度さたゝかふ必要

實際上に個々の家庭に就いて考へてみると、ブルヂョでもプロレタリヤでも、男女の地位の高下が余程少なくなつて來てゐることは事實である。

戸主制度や法律上の不平等から女子を奴隷扱ひにすることの不可ない事を承認し、又、實際に、全く男女平等の生活をしてゐる人たちもあるのではあるが、これは問題にならぬほど少數にすぎずして、大多數の男女は、なほ、都會にある人も農村にある人も、男女平等の原則を承認するどころか今なほ、封建的な女子のれい屬を當然のもの、絶對不變のものと信じて疑はないでゐる人が非常に多いのである。

勞働婦人の指導に當られた方々の知つて居られるやうに、勞働階級においても、同年輩の男子に許されて居る個人的自由が女子には全く許されず、外出困難のために集會の出來ぬことは周知の事實である。平素は殘業と僞つて親にかくれて組合の會合に出席してゐた婦人達が、失業後、外出の口實を失つてしまひ、自然組合運動と絶緣した例を、私は最近にも三つ四つ聞き込んでゐる。

また私は男女同賃問題についてある勞働婦人と話したのだが、『日本の男の勞働者には男女同賃が自分の利益だなどわかる人は餘りありますまい。女がそれを要求すれば「何だ、女のくせに生意氣だ」といふ一言で片づけるに極つてます。まだそんな要求が組合の問題となるには大分間がありますよ』といつた。これが相當に根强いものであることをたれか否定しやう。「女の子は親や兄のいふ通りにしてゐれば間違ひはないのだ。工場に行くと生意氣に組合なぞへ入つていけない、工場をやめてしまへ」私は說きつける言葉がないのでいつも默つてしまひます』

これはある女工の手記ですが、これが勞働婦人通有の事實である以上、封建的家族制度と勞働婦人とは無關係であるとか、プロレタリアの間では男女の平等が實現されてゐるとは、冗談にも口にすることの出來ぬことである。

年改りてきく抱負

勞働婦人協會

小澤豐子

大正十四年から十五年に移らうとする年の瀬は、勞働部にとつて一つの大きな建直しをする機會となりました。其原因は內的と外的とに分けることが出來ます。內的と云ふのは、今まで滿二年の間何か外へ向つて爲さう爲さうと努力して居、其必然の結果として、我々貧しい者にとつては、これ以上どうすることも出來ないと云ふところまで物質上で餘裕が無くなり、それぱかりでなく、我々の爲すべきことゝ云ふのが、今までのやうに外に向つて大きく運動してみやうとか、一段高いらしい位置から、指導者らしいことをしてみやうとか云ふことではなく、我々一人々々が、貧しきしかも、このゆきづまれる世の熱愛者として、小さくとも基礎の固い團結を作つて、其處で考へあひ學びあひ、しかも立ち上つて運動を起さねばならない時には、自信ある行動の出來るやうに用意して置くのが、我々の眞に行くべき道であるのではなからうか、と云ふところに誰もが氣がついて來たことです。

外的の原因と云ふのは、勞働部の親元のやうである聯合婦人會其物が、やはりこの十四年から十五年に移る時を機として改造されたことです。聯合婦人會が改造することになり、又どんな風に改造されたかと云ふことは、今こゝに云ふの必要がありませんので申しませんが、結極、聯合婦人會の中の一つの部として存在して居りました勞働部が、この際獨立して一つ

の會になり、聯合婦人會を形成する一つの團体となることになつたのです。今まではども勞働部は、聯合婦人會の一部分として生きやうとするよりも、一つの小さな會としてずんずんと延びて來てしまつたやうな形ですから、今更、特別何もむつかしいことはなく、たゞ名前を附け更えて、世間に對して披露すればいゝのです。

併し、名前も附け更えることになり、前に述べましたやうな內的な心持の變化があれば、自然この際組織も改め、目的も書きかへて、新鮮な心持で大正十五年の正月から一歩を踏み出さうと云ふことになりました。そして勞働婦人協會と云ふ名を附け左の様な申合せを作りました。

△勞働婦人相互の啓發向上を目的とします。

△同人及會員をもつて組織し、同人は月額金一圓の會費を負擔し本會に對して無限の責任を負ひます。

會員は本會の主旨に賛同して月額金貳拾錢以上の會費を負擔します。

△私達の目的を達する爲に婦人勞働問題の理論と實際の研究、輿論の喚起等の爲に働きます。

△同人は每週土曜日夕方、研究會其他の爲に集合する習慣を持ちます。

現在のところ左の人々が同人となつて居ります。

村上　秀子　　永島　暢子
田上　靜子　　大橋　豐齊
八木　秋子　　熊谷きさよ
唯岡　富子　　八木澤若栄
河井　律子　　鈴木　鈴子
山田　安子　　加藤　絹子
小澤　豐子

また聯合婦人會に對しては、村上、大橋の二姉が本會の代表者として常に出席し、聯絡をとることになつて居ります。

私共の希望するところは、世の多くの姉妹達、實際の運動にたづさはつて居る婦人も、一個の職業或は勞働婦人として立つてゐる人

も、静かなる家庭の婦人も、いささかでも共に棲む世の事を思ひ考へる人であつたならば、出でゝ共に啓發する志を持つて頂きたいと思ひます。お互に知識を交換し、友情を高めて行くことによつて何等か、意義ある仕事の出來るだらうことを思つてみたいのです。

一九二四、一二、二四、

婦選運動と大正十五年

金子茂

年が變つたからといつて、急に人間が偉くなつたりなんかしない以上、今年が沈滯してゐたとか、來年こそそれを破る機運が起らうとかいはれてゐるにしても、私には全く豫想といふことは出來ない。

婦選運動に於ても、私は、今年の障害は、又來年の障害だといふ氣だけがするのである。從つて抱負などゝ改まつて聞いて頂いても、口幅つたい何もなくて、默つて、あひかはらず、欲しいと思ふ者が、力をあはせて目的のために、歩き續けて行くだけだと思つてゐる。だから、大正十五年も亦、前年と同じ行き方をするより他はないと思つてゐるのである。

大正十四年度に於ける婦選運動は、とまれ、從來のその歴史の上に、最も組織だつた運動の行はれた年であるといふ事は出來やうと思ふ。この年に主として運動をしたのは、婦人參政同盟と、婦選獲得同盟の二團体で、上半期に於ける第五十議會に對する運動は、互に連絡を取つて、一、婦人參政權、二公民權、三、結社權の三方面に對する獲得、即ち婦人が政治に參與するにあたつての全的要求を掲げて迫つた。

その結果、一、二、の建議案と三、の法律案は衆議院を通過したが、貴族院に於て、貴院改革の爲に未曾有の混亂裡にあつたその貴族院に於て一委員附託となり乍ら、遂

に不成立に終つたのであつた。

又獲得同盟で行つた請願運動（へ全國へ發送書數九万）の結果は、九月の閣儀で、公民權は不採用との決定を見た。

下半期に於ける二團体の主力は政治教育に注がれた。參政同盟は、明治大學で公民講座を開き、獲得同盟は、田川大吉郎氏を聘して聯續講座を開いたと共に、各地方に政談演說會を開き、支部の設置に努力したので、前者には大阪、後者には千葉に各その支部を得た。

大正十三年度の大會のとき婦人參政權に對して時期の尙早の理由で否決した全關西婦人聯合會は、十四年度の大會では、殆ど何等の反對も見ないで、之に關した一切の議案を可決し、實行運動に移らうといふ意氣を示した。

一時は解散說を、獲得同盟に大同團結的參加をなすの理由で一傳へられた日本婦人參政權協會は、その母体たる基督教婦人矯風會四月の大會で、存續することに確立獲得同盟總務理事久布白落實氏がこの會の主腦者の地位を退いてから後をガントレット恒子氏が受けて、これも亦政治敎育運動に志す事を示し、万國婦人參政權協會名譽會長キヤツト夫人から、その方面に關した圖書數百部の寄贈を受けなどしたが、實際には余り仕事をしなかつた。

政治研究會婦人部は、最も共產主主義的色彩のつよい婦人團体とみられて居たが、十四年度の大會の時の婦人部提出の議案の中に、婦人參政權の要求が擧げられてゐた。

さて如上大正十四年度の婦選運動を顧みて十五年度を想ふ時に、やつぱり私は、今年の障害は、來年の障害だと思はずにはゐられない。然つて、目的に向つて步みつづければよいと思ふ私にとつては、その障害に對しても、同じやうに默々と鬪つてゆくよりほかはないと思ふのである。

障害とは何であらうか。

どの婦人團体運動でもが同じやうにもつところの財政難、特に婦

人には、訓練の機會が與へられなかつた爲の團結困難、これ等を內に持ちながら、外には、事あれかしと待つてゐる社會の耳目、殊に新聞記者等の興味中心的な探訪慾の相手になり、第三者の勝手氣儘な批評の的になることは、婦選の實際運動にあたり婦人團体に共通の苦しみであり、當然の障害なのである。

　全國的にあらゆる階級の婦人を網羅したいといふ考へから、出來るだけ廉い入會金と會費を取る事にしてゐる婦選獲得同盟では、運動費どころか、經常費さへも不足勝で、財務委員會は悪戰苦鬪を續けたし、婦人參政同盟は、度々組織の變更や、役員の改選を行つたので、內訌續出といふ風に傳へられ勝であつた。

　婦人參政權に對して一般の人々が無理解であること、一般婦人が無自覺であることなどは、今事あらたに取上げる問題ではないが、今擧げたやうな諸種の障害は、かなり實際上の運動を續けてゆく當面の人々には、骨の折れる妨げである。その上に、この運動に加へられる知識階級側の理論上の反對は、又大きな困難をもち來すものと私には思はれる。

　例へば、現存の婦人參政權運動をブルジョア婦人の運動とみなして、これを無產婦人をも含めた眞の大同團結的運動として發達させる事に反對するやうな考へ方、性別による組織の仕方に對する反對。これは、やゝもすると、漸く固まりかけた、婦選運動を、根本的に分裂せしめる結果をも招致しないと限らない事であり、延いては、婦人全体の上におかれた婦人參政權問題の解決を、益々遲くれさせる結果になりはしないかといふ事を、私は考へさせられてゐる。

　一般的には極じりじりとであるとはいへ、婦人參政權といふ事がすでに一つの常識とならうとしてゐる今日の傾向の前に、私共婦選運動者は樂觀の杯を擧げる間に、かうした變を熟視する必要がある

のではなからうか。

世の中が一般的に常識的になつて來た事は、この運動を更に益々積極的に發達させるであらう故に、十四年度に比して十五年度の運動は、勿論、より組織的に、より大きく、深くなされなければならず又、なされ得ると信ずるけれども、運動が積極的になると共に、社會の態度にも、ある積極さが加はつてゆく事も當然であらう。

獲得同盟の中央委員は、創立當時からその大半が職業婦人であつたが、最近には、其反對な家庭婦人の間にも、會の爲に活動する爲には、自ら働く外ない事を痛感して、自ら經濟的に活動を初めた人が數名あり、事實上、殆ど全部が自分で働いて、自分で會に盡してゐる現狀である事は、かなり興味のある問題ではなからうか。

同じ會が、十四年秋、千葉支部を設置するに際して、同地警察側の尠からぬ壓迫が加へられた事は今後もその方面に運動の方針を改めずに益々續けてゆく以上、又、各所に起るにちがいない事ではあり、やがては何等かの社會問題を惹起するに至らぬとも測り難い。

今日婦選運動に參加する人々にも、その思想的、社會的、その他に於ける差別はまことに種々雜多である以上、もしそれ、ある人々のいふやうに、參政權を獲得した後のその利用の範圍の差に依つて、獲得運動の團結も區別されて團結するべきものであるとするならば、やがて、現存の婦選運動の團体は、當然の歸決として分解作用を起し、その決裂をみるに遂ひないのである。已に獲得同盟が、その運動の爲に大同團結を目して結ばれたとき參加しなかつた團体、或は個人の中に、これを理由としてゐるものが少くなかつた事實もある。

しかも參政權獲得は一つの門扉を蹴破るにすぎないのである事を考へる時に、私は、大衆の力によつて一擧に蹴破る事こそ、最も力ある事だと考へずにはゐられない。從つて私は、この運動の力をちら

すやうな分解作用が、故意に起されるる必要を認めえないのであり、現存團体以外の婦人團体が、新に組織され、或は新らたに實際運動に加はつて來るにしても、その事それ自身が現存の婦選運動に力を加える事にこそなれ、力を殺ぐ事にはなる筈がないと信じてゐる。

その意味に於て、起つべきものは起ち、馳せ加はるべきものは加はつて、十五年度の運動が益々力づよきものになされん事を祈る次第なのである。

とまれ、私たち婦選運動者は、默つて、歩かうと思つた路を、歩いてゆけばいゝのである、去年も、今年も、來年も。

女子學生聯盟の逆委員として

横山千代

今や、時代の本流は、滔々として何物をも押し流さないではおかないのであります。そして瞬時たりともとどまることなく、常に文化にむかつて進行しつゝありますが、此の巨人のごとき時流に對しては、いかなる暴力、いかなる迫害を以てしても、これを堰き止めることは到底不可能であると信じます。

人間がお互に自由に話すことの出來た言葉も、現在の社會では完全に言ふことさへも許されない。人間と生れ、しかも文明社會に生き乍らこれほどの不自由な事が又とあるでせうか。無產階級がながき搾取と壓迫の鐵鎖の下に、手も足も、そればかりではなく心までも縛られて、今では完全に言論の自由を奪はれて了つてゐると同じやうに、女性も亦、在來の社會生活、傳統、習慣等あらゆる壓制のもとに、男子の奴隷の未だ存在しなかつた以前から既に奴隷として、すべての自由を奪はれて了つてゐるのであります。男子と同じく、人間としての共同の責任を負はされ

乍ら私たち女子は何等の權利も自由も與へられて居りません。人間としてこれほどの不幸があるでせうか。女子にとつて、現代社會は實に生きながらの墓場であり、冷き暗黑の時代であります。私たち女子のお互は、文明の成果を愛することも樂しむことも出來得ないではありませんか。そこに何の歡びがありませう。何の幸福が見出されませう。

燃ゆる血汐と强き決意の死の沈默、此の息づまるやうな泥沌たる時代の渦中にあつて、私達はいつまでそれに堪え得られませう。飽迄生き樣とする絶對の力は、自由をうばはれた者の中にのみはじめて生れる、私達の眼前に、幾多の困難と壓迫と迫害とが待つてゐることを知るとも、而も私達は、どうしてもこの暗黑と恐怖の闇を切り開いて進まなければならない。

だがそこまで進む間には、光明と理想を胸に燃しながら、空しく斃れてゆく幾多無名の犧牲者のあることを覺悟しなければならない。いつの時代にも、その使命を負つて解放の光も、自由の歡びも見ずに、默々として自己の部署に甘じ、酬はれざる生涯を正義人道の傘下に死を賭して鬪ふ無名の同志こそ眞に尊き犧牲者であります。私たちはしづかに過去を省みて徐ろに、私達のこの力で、鬪ひつゝある人類の希望と向上のために、全女性の協同と全人類の愛の結合のもとに、最善の努力に依つて未來社會への勇氣と確信とを以つて進まねばならないと信じます。

私達の力は、より多く學ぶことによつてより多く生れ、且つより深められるものであります。より大なる力は、より大衆の意志と要求とを代表するものであると信ずるが故に、私達の初志の貫徹、女性の使命の遂行のためには、大衆の結合力以外に何ものもありません。幾多の社會事象に照して、正しき批判と之を洞察し得る聰明さとを持つ女性となるにも、やさしき次代の母となるにも、私達女性

は、余りに自已の力の小さく、余りに學ぶ機會の少なすぎるのを痛感いたします。力を得やうにもその道を拒まれ、學ばうにもその願ひを充されない現代社會は、何と云ふ大なる矛盾であり不合理でありませう。

私達の此の切實な要求、燃ゆる情熱と强き意志とは、互の心から心へと意外の强さをもつて響いてまゐりました。敎育の機會均等の運動は、今後いよいよ擴大し充實されるであらうことを信ずることが出來ます。

かくて私達は、人間として、はたまた女性としての幸福のために、更に組織的計劃的な運動へ突進すると共に、あらゆる機會とあらゆる場所を利用して不斷の潜行運動をつゞけやうと決心してゐます。觀念運動を離れて、女學生を中心とする女性大衆の中へ眞向に進むで行く時が來ました。大衆を離れてはなりません。大衆の向はうとする意嚮を究め、決して大衆より眼を離してはなりません。大衆の中に在つて、內から火を點ずる事が、より根强く、而も速かであることを信ずるのであります。花火線香的運動や、單に運動のための運動、ひとりよがりのお山の大將などは私たちに大禁物であります。現實の上に打樹てる運動、而して現實を征服する力は、現實と戰ひつゝある者自身の手に握られてゐることを想ふ時、同じ立場にある諸兄姉妹の堅き結合の力を、より一層熱望しないではゐられぬのであります。

職業婦人聯盟の近況

大阪　M・Y子

大阪の職業婦人聯盟に就いて、十二月號にお書き下さつてありがたう。京町堀職業紹介所の井上一四さんや、婦人ホームの谷口さん、永田さん、女子靑年會の淺井さん等がお産婆役をつとめて下さつた

のですけれど、いざ具体的な實際運動に入らうとすると、一番多數を含めてゐるデパートの店員たちの中に、びつくりするほど不徹底な人か多いので、會の趣旨を理解して貰ふためには大骨が折れます。でも、大阪朝日新聞があれだけ力を入れて呉れますことでもあり、みんな、何がなしに、とにかく一緒に力を協せやうとしてゐるので發起者たちも喜んでゐられます。

ぜひとも大阪の職業婦人のあらゆる階級にわたつて網羅したいといふみんなの希望でしたが、殘念ながら今のところ偏つたものでございます。なぜかと云ひますと、この運動の主唱者がみな、女子靑年會だとか、婦人ホームだとかのクリスチヤンが大部分であるからでせう。

一月の中頃には、中央公會堂ではなばなしい大會をやるといふ目論見ですが、それまでにはぜひとも、宗教的に偏らないで多數の婦人たちが集まつてほしいものでございます。然し、思ひ切つた聲をあげることは恐れねばならぬ關西の風雲では、やはり工場の婦人やウエトレスといつた部類の人たちは避けてゐられるやうです。それに就いて、先日代表者會のときに、印刷工の久津見房子さんが見えられて、一場の氣焰をあげ、勞働婦人の眞劍さをイカンなく見せてみんなを緊張させなさいました。そして結局、ゆくゆくはみんな手をつないで進まねばならないのであるけれど、時節が來るまで、勞働婦人の方たちには、かげで應援をして頂くことにしませうといふことに諒解がなりました。

東京の職業婦人運動のその後はいかゞでございますか。切に切にわが職業婦人社のかたがたの御自重を祈ります。

あなた方の大阪支部の設置が、奥さんの御家庭の事情で年越しにのびたことはほんとに殘念に思ひました。一月早々是非やつて來て下さい。東と西と、聯絡をとり、助けあつてやりませう。



女教師は教育に眞劍でないか

——主として戀愛、教育愛に就いて——

下中彌三郎

一

男の先生たちの噂をきくと、女の先生たちは教育に眞劍でないやうだといふ。

それならば、男の先生たちは教育に眞劍だらうか、と問ひかへして見ると、『サア?』と顏を見合せて答へない。

今の世の中では、男の先生も女の先生も、概していふなら教育に眞劍でない。たゞ、男の先生と女の先生と、どちらに眞劍な態度でこの仕事に從事してゐるものが多いだらうかといふことになると、やはり、男の先生の中には、可なり眞劍な人もあるが、女の先生の中には、どうもこれが至つて少ないといふことにはなるだらう。

二

何故に女の先生たちは、概して教育に眞劍になり得ぬのだらう。それにはいろいろの理由——例へば、女の先生が教育界から與へられてをる地位が至つて低くて、機械的な仕事にしか振りあてられてゐないから自

已の創意を敎育の上に加へることがその地位の上からして、男の先生たちに比べてずつと少ない、といふやうなこと、しかしこれは、女の先生たちがひつこみ思案で進取的でないといふやうなことから、結局、さうした地位に置かれるやうになつてゐるのでもあるが、一つにはまた、男の先生たちが、女の先生たちを先づ弱いもの、頭のはたらきのないものと見くびり、その女の先生たちをかばふといふやうな心持から、そんな機械的な地位をおしつけるのだといふ工合にもなつてゐて、因と果とがあざなはれてゐるからでもある――しかし根本的な理由は、

女には戀愛があつて、

敎育愛がない。

といふことではなからうかと言はれてゐる。これは男性としての男の先生たちの側での想像であるに過ぎないのだから、女性の人々が内省して見られて、首肯されるか否か、敢ておたづねしたいと思ふのだが、男性の間では、更にまたこんなことが言はれてゐる。

女が男を尊敬するといふことは、結局戀愛するといふことゝ同義らしい。

女に尊敬される男は、獨身の男か、でなくともそれへの戀愛の可能を思はせる男たるに限るらしい。

女は、習いといふことゝ、好くといふことゝが一義に考へられるらしい。

女は、意識的にも、無意識的にも、戀愛するといふことによつて、その思惟もその行動も統一されてゐるらしい。

ものゝわかつた男性の間で、こんな評定がしばしばされるのを聞く。

これは、女性の方々の僞りのない心持にきいて見ねば何とも言へないことではあるが、まるつきり見當ちがひの評定ではないかと思はれる。

三

もしも、かやうな評定が肯定されるとしたならば、

女には「戀愛はあつても教育愛はない」といふやうな言ひ現はしも、まんざら虚妄とも言へない氣がする。

勿論、男の先生たちだつたところが今の教師に「教育愛」の本當の意味を理解してゐる人は極めて少ないであらう、戀愛がある意味での「自愛」であり、利已的感情の發露であるに對して、教育愛は超自愛であり、超利已的感情の發露であるのだから、女性の多くは、教育愛とはやゝ遠い感情の中に生きて居ると見るのも、宛ち不當の觀察でないかに思はれる。

四

さて、然らば、女性――戀愛のみあつて教育愛を缺く――は、教育者としてふさはしくないといふべきであるか。

私は決してさうは思はない。理性のさもしい判斷が入込まないであるならば、戀愛としての純情こそ、教育愛の根源である。純情としての戀愛は、愛の對象を、現實以上に美化し、純化し、理想化する力を與へて居る。愛の對象に對して、善さを求め、强さを求め、高さ深さを求めて、これを美化し、純化する力は、戀愛をおいて他に全くならぶものを見ない。

教育愛は、この純情に出發してこそ全きを得るのである。戀愛なきものに教育愛なしといふも不可なしである。戀を知らざる人間――男であれ女であれ――に何の教育愛ぞ！である。

五

今の女の先生たちの多くが教育に眞劍になり得ないのは、實は、戀愛に專らであるから然るのではなくて、戀愛の形式たる結婚要求にあまりにも專らであるからである。今の女の先生たちには、純情においての戀愛が缺けて居る、夾雜物を多分に含んだ性愛こそ、全くないではないであらうが、純情としての戀愛の發露が拒まれてをる形である。師範教育のそれもわるい。教育社會の空氣そのものもよくない。純情として戀愛の苗床をもたない女の先生たちは、まことに氣の毒な仕

合せと言はねばならぬ。
眞實戀愛をはぐくみ育てゝをる人々は、教育に對して決して『お座なり』ではあり得ぬであらう。さういふ人は、戀愛の對象への自由が獲得さるれば、それによつて教育愛を生かすであらうし、よしまた、對象への自由の獲得においてあぶれることがあつても、その人は、結局、教育との結婚を我から申込むであらう。さうして教育愛にその生を生かすであらう。

この意味において、眞の教育愛と眞の戀愛とは、矛盾するものでなく、從つて、『女には戀愛があつて教育愛がない、それ故に女は教育に眞劍になり得ない』との觀察は、皮相の觀察であると言はねばならぬ。
私のこの貧しい考察に對して、一般女性、特に女の先生たちの感想または批評を聞くことが出來るならばと思ふ。

（十四年十二月二十日）

近詠十首

柳原燁子

いつの日かあひまつるべきその日ぞと際なくりぬ新としの春
若くして夢うすかりし昨日の夢の中より放たれしわれ
梅の木のあるかなきかの蕾これ大地にひそむ春のたましひ
あきらめにやうやく生きてありし日のわれを問はれて涙さしぐむ
はるばると遠きをおもふ大空はなつかしきかな君見ゆるがに
わがうへにあれと願ひしちゝはゝのなさけは子等にあるが淋しき
あたゝかく相倚る子等と何おもふ外面にふくか風もみぞれも

生活斷想

中河幹子

×

ある師走の雨の夜である。

電車に乘ると向ひ側の雨にくもつた窓硝子に、いくつもいくつも『恭賀新年、恭賀新年』と指で書き散されてゐるのが目に這入つた。

今から正月氣分になつてゐるのだなと思つた。そして心に、ほのかに涙をそそるやうな微笑を感じた。

×

お隣の叔母さんから、三歲になる女禮が大きい饅頭を一つ貰つて歸つて來た。五歲になる兄の眞一は、それをみて、たまらなくほしくなつたのだらう

『めーちやん半分こね』やさしい聲でいつた。が女禮には大好きなあんこなのである。

そこでうばひあひがはじまつたらしい。喧嘩の聲で私が走つて行つた時は、女禮も眞一

もロがふさがらない程に一杯あんこをつめ込んでゐる。このたはいない爭鬪は、私を憂鬱にはしない。光景に一つのユーモアがあるからである。
私は二人の子供をにらみながら、をかしくなつて到頭笑ひ出してしまつた。
如何なる深刻な場合にも起るユーモアといふものがある。私はその事に就いて考へてみたいと思つてゐる。

×

子供達眠りに入り
靜かなる夜ふけとはなれり
さしあたり何をしなければならずといふものなき心やすさに
書架よりぬき出して來しこれは
木下利玄氏の歌集『立春』
讀みゆくに
『二郎に』と題する一連あり
『開け閉ての戶の音はゞかりおぢ氣なし今はさめなん吾子ならなくに』
子の死を前にせる父親のしとやかな起居のさまなり
かくも子が死を悼みし人、今又既に故人なり
歌集『立春』の手ざはりのかなしさ

何をしなければならずといふものなき心やすさに
卷きかへし、くりかへし讀みかへしつつ
夜は更らにふけゆきたり

×

ある老人が、株のことについて話してくれた。それをきいて私は東新を定期で買つてみたくなつた。『から景氣がむきなほつてきてゐるんだもの、十中八九間違ひはない』私は保證金がほしいと思つた。そして翌日早々何とかして買いたいものだと思つた。

翌日は一日來客が七人もあつた。夜やつと戸をしめ、子供をねかし、さて起きると七時半、机の上をとりかたづけてゐると、また赤ん坊が泣く。いつて添寢してねかしつけて起きてくる。そして机により書き散らかしてある歌稿の淸書をしてゐると、今度は姉の方が大きい聲で泣き出した。これにはいつも閉口される。折角寢てゐる赤ん坊までが起きてしまふので。でまた机の上のスヰッチを切つて寢室へ這入る。そして靜かになつて起きてくると、もはや十時。

ふつとさつき讀んで捨てた夕刊を拾つて、讀みなれてゐた株の欄をみた。東新はすばらしいあげである。朝十株買つておいたら今頃は二十六圓儲かつてゐたのだ。百株買つておいたら二百六十圓、千株だつたら二萬六千圓儲かつてゐたのである。

金があれば遊んでゐて儲けられるし、金がなければ、もうけ方を知つてゐても儲けられ

ないのである。

その翌日老人が通りがかりにまた寄つてくれた。そして殘念がる私を前にして、

『けれど十株買つておいて下げをくつて今頃二十六圓損をし、百株買つて二百六十圓、千株買つて二千六百圓、萬株買つて二萬六千圓財産をすりへらしたのよりは、よかつたでせう』と言つた。

私は損得にかかはらず、自由自在で然かも大きいその世界の動き、老人の論理を面白く思つた。

然しさういはれてみても私はやはり自分の金の無い事が殘念でならない。來年は夫と一緒に兜町へ行つて見たいと思つてゐる。空想の中で得をしたり、損をしたりするよりは、一つぞ男らしく、まのあたり損得をしてみたい氣持ちである。

四十萬の同志を祈る

池田こぎく

今日は暮れの二十日です。

ここ二三年といふもの、冬がきて、木枯の風が吹きはじめると、年々持病の蓄膿を病み出して、冬が冬中病院通ひをしなければならなかつたので、今年こそはと思つて、昨日ストーブを買ひました。年の暮の金をなげ出して。

炭屋が石炭を運んでくる、金物屋が煙突をぬきにくる。ストーブは、かつぎ込まれる、……用意はできた。さあ、じつとしてられないぞ、と、いつた氣持になつて、私は机の前に座りました。

そして、年賀狀の註文を忘れてゐたことに氣がつきました。

去年もをとゝしも、その前の年も、ずつと忌中續きで、年賀狀もかけなかつたのですが今年こそはと思ふと、何だか最近にないいゝ春を迎へられさうな、うれしい氣持がし出しました。年賀狀……。うれしいな、どんな風に書かう、と、私は子供が春を待つ樣な氣持で考へました。

今迄はずつと『おめでたうございます』とだけ書いて來たのですが、四年振りの年賀狀へ、今年はどうもそんな間の拔けた挨拶をかきつける氣がしません。どうかかうかと、暫く考へてから自分は次の樣な言葉をならべて見ました。

他人の持つてゐるいゝものを

素直に尊敬できないのは

自分の中に

傲慢がはびこつてゐるからだ、と
今、氣がつきました

この頃自分の中から
いろんな變つた芽が
すくすくと頭をもたげ出しました
みんな雜草でないか知ら
ほんの一本でも
花咲くのがまじつてゐたら
うれしいけれど
何といふ恐しい、しかし、樂しい春を、迎へたのだらう
三十四歳！
しかし、自分も
もう氣づかねばならなかつたのです
書いたり消したりして、とにかく斯うした形のものを拵へ上げたのですが、その間に私
すつかり緊張してしまつたのでした
『この頃自分の中から、いろんな變つた芽が、すくすくと頭をもたげ出しました』さう

だ、それは嘘でない。官僚といふ空氣の中に住んで、規範といふ手綱でしつかりしばりつけてゐた筈の自分自身なのだけれど。しかし、それは本當にさうなつてきたのだから仕方がない。と、私は思ひました。

その芽、それは立派な作家になれる筈の藝術の芽なのか。それとも、人間お互の重荷にまつしぐらにつかみかかつて行く樣な、反逆の芽ではないのか。へこたれるのか、勝ちほこるのか、尊敬されるのか、獄舍につながれる樣なことになるのか。仕方がない、どうなつても仕方がない。三十四年もかかつて、出させた芽だから。例へ皆が皆まで、せうにも立たない雜草の芽ばかりであるにしても、一本も拔きとるわけに行かぬ。しかし、この芽皆なが皆まで雜草だつたら、今に自分は獅子頭の樣な、ぼうぼうと生へ茂つた變なものになつて終ひはせぬだろうか。それでも。うまく手入をしたら、せめて雜木林にでもなるか知ら。木林……何にでも用をたせる、圓滿な人望家……いや、それならいつさう、もとのまんまの、獅子頭の方が、遠慮がなくて自由にものが言へさうである。まあいい。何れにしてももう十日すれば、年が新しくなることは信用ある事實である。そして自分が三十四になることも、間違ひのない事實である。さあ、ぐづついてはいられないぞ、と眞劍になつて考へたのでした。

そして出來上つた原稿をもつて、すぐ近くの印刷屋へたのみに行かうとしたら、丁度郵便が來ました。そして其中に奥さんからの原稿の催促狀があつたのでした。

働く女、働く女仲間、その仲間が本氣で讀む雜誌。この雜誌にいつ幸福がめぐつてくるだらう……私は何時も、そんなことを思ひながら、奥さんの前途を祈つてゐますが、今日はとくに、こんな心持になつてゐたもので、その催促狀をうけとつて、すつかり泣きたい樣な氣持になつて終ひました。そして印刷屋へは行かずに、そのまま机の前に引きかへして、この稿をかきかけたのでした。

しかしストーブの中へ一杯に、ほり込んだ無煙炭からは、青い焔が狂ひたつてゐます。そして湯はしゆんしゆんと、たぎつてゐます。熱！私の頭の中へは、さうした氣持が、こみあげて來ます。どうして落ついたいい原稿が出來ませう。

となりの部屋では、世話してゐる親類の青年が、もう三日したら試驗に出なければならないのだといつて、捻り鉢卷で代數をやつてゐます。

『大丈夫かい』

と、聲をかけたら、

『やつて見せます』

と、答へました。

もう十日したら元旦で、九日目のばんに除夜の鐘がなるのである。そして、その鐘を四十萬人の私の仲間は、みんなどつかで聞くのである。小學校だけで女教員がざつと千五百幼稚園に女學校、たしかに四十萬人はある。さうだ、教育界に席をもつてゐる仲間は、た

しかに四十萬人あるだろう。その同志が、その夜みんな、同じ時刻にその鐘の音をきくのである。うれしいことだ。今年こそは素直な氣持で、眞劍に同志の幸福を祈つて見様。この仲間から、一人でもよけい力强い人を出す様に。一つでもよけい正しい叫びの出る様に。平氣で嘘をいふ様なものを一人も出さない様に。そして私達みんなが、人間らしい自然の道を、大股でドシドシ歩いて行ける様に。もう十日したら元旦である……………そして、そんなことを考へてゐると、いよいよのぼせて終つたのでした。

しかし、書くことを約束しては何時も、さぼつてばかりゐますので、今日こそは何か、かかなければ、お申譯がありませんし……………とにかく私は今、こんな氣持で春を待つてゐることだけをお知らせして、埋草にでもして頂かうと思つて、この稿をかいたのでした。

——一四、一二、二〇——

「婦人運動」讀者懇談會！

一と月に一度ぐらゐ、みんなで夕飯を御一緒にしながら話し合つて樂しみたいと思ひます。第一回を左の通りにきめておきますから、あなたもぜひいらして下さい。

一月十六日（第三土曜日）夕方より
神田區淡路町二ノ三萬生閣にて

當日下中彌三郎氏にも來ていたゞきますからいろいろお話しませう。

子守歌

ドイツ 銀の小雨

◇

坊やよねんね
雨が降る
銀の小雨が
しとしとと
夢のお國に
降りまする

◇

坊やよねんね
雨が降る
銀の小雨は
銀の糸
坊やの人形
作りませう

祭の夜

欅の葉つぱの運命

宮崎安右衛門

私の家の直ぐ傍に、百年以上もたつたかと思はれるやうな巨きな、素敵もない欅が一本あります。

ぽかぽかとした暖かい春が來る。箒を逆さまにしたやうな冬籠りの欅は、幽に眠をさます。やがて、春が來ます。うれしい春が來ますと、欅は大喜びでおべゞの支度をはじめます。おゝごらんなさい。箒のやうに痩せた欅の頂上を青い星のやうな嫩葉が、ほつちりとほゝ笑みます。なんて、すがすがしいオベベでせう。私は毎日その嫩葉を眺めてゐますと恰度小鳥のやうに、その新しい嫩葉たちは、一寸とした風にも顫へて小さいおつむりを下げてゐます。

高い高い樹木の上から見れば、日本一の富士も見へる、甲州一帶の山脈も見へる、遠くむさし野の平原が夢のやうに展かれてゐる。元氣な葉

◇

祭の夕べ
靜かに暮れる
ちらちら小雪
靜かにふれよ

◇

愛しき和子の
幸ある今宵
人形は胡の
褥に山と

◇

祭の宵は
靜かに流る
坊やよねんね
夜が明けるまで

米國

眠りの國

ツぱ達は、毎日これらのよい景色を眺めながら、成長してゆきます。

夏が來る。熱い熱い夏が來る。

その時分には、青い若葉も、陽にてらされて幾分黑くなる。早いものですよ、樺の葉ツぱは二ケ月目位で直く立派な大人になるのですからね

然し、ドンナに暑くなつても大丈夫、高い頂上の方は空から甘い涼しい風が毎日訪ねてきて、小さい葉ツぱ達を煽いてくれるのでちつとも暑くない。その時分になると、小鳥が澤山訪ねてきて、枝にとまつたり、あつちの枝から、こつちの枝へ、ぴよんぴよん飛んだり跳ねたりして、葉ツぱ達とお友達になります。そして、夜になれば、小鳥達は枝に、ねどこを變へておねんねをしますよ。美しい星が光つて、小さい葉ツぱや小鳥達のおつむりを照します。吃度、星が云つてゐるでせう。

「あの高い樺には何萬といふ葉ツぱと、そして小鳥たちとが仲よくおねんねをして居ますから。私達はよく守つてあげませう……」

といつてね。そろそろ秋が來る。淋しい秋が。

秋が來る時分になると、葉ツぱは段々老人になつてきます。御覧なさい。青黑いオベベがいつの間にやら、黄色いオベベになつてゐます。かうなると寒い冷たい北風のオヂサンが、毎日のやうに來て催促です。

◇

眠りの國は
夢の中
國の丘には小人が立
つて
よい子お出で
花あげよ

◇

眠りの國は
夢の中
圓い丘に
兎が立つて
坊やよい子
餅あげよ
お目々……
つぶれば
玩具の人形

「ざあざあ、葉ツぱ達。お前達は永い間、よい景色を見てゐたのだから、今度は地べたへ歸へるのだ。地べたはお前達の故郷なんだから。さあ、支度はよいか」

と云つて、ぷうぷう……と寒い風を吹きます。大變大變、葉ツぱ達は大急ぎで支度を初めます。

小鳥達も寒くなつてきましたので、いつ迄も枝の上へねることも出來ません。それに、お友達の葉ツぱが、一日一日みんな出てゆくので大變に淋しくなつてきた。

其處でもつと暖かい處へ引越してゆくことに決めました。

「葉ツぱさん。永々とありがたう。私達も引越しますよ。又來年の春になつたら戻つてきますよ。サヨナラ」

小鳥がおわかれの挨拶をすると、葉ツぱ達も元氣よく、

「サヨナラ。ごきげんよう」

と言つた。小鳥は遠い遠い空へ目がけて飛び去つた。すると、再び北風が、ぷう……と吹きたてた。木の葉は慌てゝ枝を離れた。でも枝へ挨拶だけは忘れませんでした。

「サヨナラ。又來年參ります、お丈夫でゐて下さいね」

闇をゆく
お目々つぶれば
小さなお馬も
あるき出す
お目目つぶれば
あるき出す

み空の星も

フランス

◇

み空の星も
もうねましよ
みどりの空に
靜かに伏して
おとぎの國の
夢見てゐるよ

◇

野原の花も

枝は多勢の葉ツぱ達とわかれるのが辛いと見えて、悲しさうな樣子をしてゐました。

「何を其圖其圖してゐるのだ」北風のオジサンは大層叱つた。葉ツぱ共はびつくりして枝から飛び離れた。そして風に揺られながら、いろいな形で大地へ歸つて行きました。ドンナ形をして歸つたでせう。

ほろほろと落ちゆく葉ツぱ、キリキリと舞ひながら降りる葉ツぱ、さらさらと、一度に何千といふてをどつて降りる葉ツぱ、そうかとおもふと、

すう……急角度に、たつた一人きりで落ちてゆく葉ツぱ、

中々美事なものです。ある葉ツぱは風につれられて遠方へゆく、そしてある葉ツぱは表を通る兵隊さんのお馬の背に乘つて軍隊見物に行く、中にはあんまり飛びすぎて、活動寫眞館の窓にひつかゝつて愉快な活動寫眞を見たり、音樂を聞いたりする。勿論こんな仕合せな葉ツぱはメツタにない。

ある葉ツぱは河に流れて、ドンドン海へ行つて了ふ。見たこともない大きな海へ。すると其處へ魚が來て、ほかりと大きな口を開けて、葉ツぱを呑んぢやつた。

もうねましよ
可愛い虫の
お唄も消えて
小人もみんな
夢見てゐるよ
夢見てゐるよ

百合咲く國

◇

夢の國は
綺麗な國
百合の咲いた
白い國

◇

可愛い子等が
手をとつて
やさし、やさし
天使はあそぶ

ある葉ツぱは往來へ落ちた。娘の子が拾つた。

「あら。キレイな葉ツぱ、わたしお人形さまのオべべにしませう」

可愛いお人形さまのオべべになつて出精する。

ある葉ツぱは氣の毒にも道路の犬の糞の上に落ちた。

ある葉ツぱは、お湯屋の煙突へ舞ひこんで忽ち火に燒れた。あるものは溝の中へおツこツた。

ある葉ツぱはお孃さんの肩かけに引かゝつた。

「なんて可愛い葉ツぱでせう。まるで小鳥のやうだわ」

と云はれてキスを貰つた。こんなことを破格の光榮といひます。中には電車の屋根へ落ちて東京の市内を一巡するものもあつた。又ある葉ツぱは貧乏人の軒の下の庇の蜘蛛の巣に引つかゝつて「やい、まごまごするない」と大層蜘蛛に叱られてゐるのもあつた。

斯うして何千何萬と云ふ葉ツぱが、みんなそれぞれの運命があるのです。然し大抵は欅の傍へ落ちて了ふ。私は毎日それを掃きよせて溜めて置く。日曜日が來ると、小さい子らが安右衛門の童話を聞きに集つて來る。朝のうちはちよつと寒いです。

「おい。みんな此處へあつまれ……」私が號令をかけますと大喜びで

日本

ねんねん
ころり

ねんねん、ころころ
ねんころりん
泣くと山から
雉が來る

◇

可愛い、この子の
あかいべべ
泣くと雉めが
さらひ行く

英國

夜半

◇

靜かなる森の中

「先生が落葉を焚くのだぞ、行つて暖たまらう」
まもなく、紅葉のやうな小さい可愛お手が出る。
黄色いオベベを着た葉ツぱ共は、最后の愛を子供等の手に殘して昇天します。
白煙がすう……と天に登る。それはみんな葉ツぱの精です。私はそれをちやんと間違なく見屆けた。
冬が來た。冷い寒い冬が來た。葉の落ちた欅は相かはらず箒を逆さまにしたやうに高く高く空に聳へてゐました。

坊や、もうねましよ

◇

靜かな夜の空
三ケ月さんも空にね
る
坊や、もうねましよ





前例のない解雇手當をとつた話

山口敏子

　八千代生命保險會社が、盛んに婦人外交員を募集して、契約高を少しでも余計に揚げさせるためにお互ひ同志猛烈な成績競爭をするやうにいろいろ仕組んで働かせてゐることに就いては、心ある職業婦人はみな憤慨し、また、歎いて、だから、早く職業婦人自身が目ざめて、さういふ惡辣な會社にしてやられないやうに、團結して協同戰線を張らなくつちや駄目だ、と云ひ云ひしてゐたものです。

　求職婦人が非常に多い現狀にあてこんで、八千代では次ぎから次ぎからと新しいのを雇ひ入れて——やり切れなくて逃げ出す率の方が、それでもなほ、雇ひ入れて外交術を習得させる率よりもずつと早くて多いと云ふのですから、如何に婦人外交員の新陳代謝がはげしく行はれてゐるかゞわかる〳〵就職當時の本氣なまじめさで、知る限りの親戚知己友人間に說きまわるだけ廻つて無理押しつけに押しつけて契約させて來る種がそろそろ盡きたらしい頃には、もうちやんと、用事はすんだ、出てゆけがしの奥の手で壓迫するのであります。

　その八千代の大阪支店の婦人外交員一同が語らひあつて、次のやうな歎願書を會社の重役にあてゝ差出したのであります。

（この要求は、この運動の中心になつて折衝にあたつてゐた二名が突如解雇されたために、殘念ながら敗れましたが、然し、理由なく解雇された右の二人は八千代としては曾つて前例のない解雇手當（五ケ月分）を支拂はせる事に成功したのであります。よし、主だつた二人の者が解雇されても、あとに殘つた全員がもつとしつかり團結して、自分たちの要求を貫き通すまで引揚げないで戰つたら、きつと今頃は、も少しいゝ條件のもとに働くやうになつてゐたに違ひありません。

足並みが亂れたら、その虚をついて叩きつぶされてしまつて、結局、もつと惡い條件にまで引下げられてしまひます。職業婦人の持つ武器は、唯一つ、あくまで鬪つて退かない團結の力ばかりといふことを、今更らにしみじみ思はされます。

歎願書

大阪市女子外務員一同

一金五萬八千五百圓也

責任額の件に就て

（但し一日六百五拾圓　平均

九十日分）

最近本社より御發表になりました責任額（ボーナス獲得線の引上げ）變更の件に就きまして、吾々女子外務員が、その如何に堪え難き苦痛であるかを陳述し、是非共これが引下げを、愛と大家族主義のモツトーを掲げて進むわが八千代生命の人格者小原社長、並びに幹部御一同に歎願する次第でございます。

わが八千代生命が、從來の男子外務員に代ふるに女子外務員を以てせられたことは、吾々婦人の職業分野を擴大し、飽くまで舊き陋習の上に執着する保守的な他會社に對して、その革命的意氣を示された點に於て、衷心から喜ぶものでございます。亦一方、根本的にこれまでの歩合制度を廢して、日

給制度とせられたことも、誠に時代に適應した施設であつて、吾々は常に他社に向つて誇りとしてゐる次第でございます。然るにこれ程明敏な新しい組織を持つ吾が八千代生命が、その特に女子社員の多數を使用する上に、未だ理解の足らざるを憾みとするものでございます。

吾が社が滿二十三才以上、卅五歳までの者を採用さるゝ以上、その大部分は既婚者であることを先づ何よりも知つて頂かねばなりません、さうして、女子は生理的に男子よりも遙かに体力が弱く、(特に既婚者は)、且つ、社會的活動の訓練が未だ充分でない點をもよく考慮して頂きたいと存じます。

(一)女子が、無制限にして繁瑣この上もない家庭勞働に、いかに多くの精力を消耗するかは、中層より下層に至るすべての主婦のみが知る深き悩みでございます。家庭の勞働を省略する文明の利器は數多く(瓦斯、電熱器、洗濯器、ミシン機械等)ございますが、これ等は使用人の多い上流の家庭にこそ備へられますが、忙しい私たちの家庭には誠に緣遠いものであります。殊に幾人かの子供ある者は、更に更に、また一層の過勞に苦しめられるのでございます。その上に貧困による精神的、肉体的痛苦は、吾々を驅つて無智と頽廢のドン底に突き落さうと脅威します。

(二)体力が男子に及ばないことは、永い間の屈從、隷屬によるばかりでなく、月經、姙娠、分娩、育兒等の生理的烈しい變化と負擔によるもので、これも、特に貧しい階級の婦人のみが、つぶさになめる苦しみでございます。

(三)最近著しく增加した私たち職業婦人は、勿論經驗が淺く、從つてその心理に於いても非社會的であり、孤獨的で訓練が足りないために、仕事に對して異常な緊張と不安に襲はれます。この心身共に纖細な婦人にとつて絕

えざる緊張と、絶えざる不安に壓迫されることは、やがてどんな結果を生むでありませう？
右の様な諸事情を御しんしやく下さいまして、何卒吾々の希望を御容れ下さいまするやう只管御願申上げます。

主婦や妙齢の娘が、締切り間際に夜おそくまで血眼になつて走せ廻り、夜半に歸宅することは、近所の手前などは別としても、夫や子供のために決して喜ばしいことではありません。

我國の所謂家族制度の美風を稱賛され、その永續を希はるゝ八千代生命の精神から云つても、誠に家庭の破壊であつて眞に寒心に堪えざる事實ではありますまいか。
これは『婦人が職業を持つの故にではなくて、働く時間が長過ぎる、即ち責任額が多過ぎるからでございます』

どうか社長並びに幹部御一同の夫人なり、令孃なりをお使ひになる心持で、涙ある改善を切に御願ひ申上げます。さうして左の如く御改正あらんことを――これは決して無暴な、又は不可能な歎願でないことを吾々は確信いたします。

改正事項

一、責任額を（ボーナス獲得線）參萬圓以上とし、内舊種五千圓と定められたし。

二、現在平均一ヶ月貳萬圓以上の者が昇給資格者とあるを七千五百圓とされたし。

三、ボーナス制定は次の項目を參證されたし。

(イ)入社以來の累計
(ロ)現在三ヶ月間の成績高
(ハ)件數

以　上

大正十一年十一月末日

八千代生命保險會社

社　長　他幹部御一同閣下

追加歎願條項

二、昇給資格者に對して、十一月附けを以つて辭令下附の件を速かに實行されたし、

三、賞與金中より解約高を減ぜら

る丶ことを免ぜられたし。

四、一期間の（三ケ月）皆勤者に對しては、相當の皆勤賞與金を支出されたし。

五、女子外務員の昇格の途を講ぜられたし。

六、解雇手當を速かに制定されたし。

以上

右歎願書に對する御回答は、來る十二月二日の午前中に表記の處へ電報を以つてありたし。若しそれ迄に御回答なき場合は吾々の眞劍なるこの歎願に對して、御誠意なきものと思ひます。

當時撒かれたビラの一ツ

親愛なる姉妹に告ぐ

二十八日附けを以つて、御手許に差上げました歎願書に對しては、全支店の姉妹は、強き共通の意志を示して、形勢は日々に有利に進展しつゝあります。

本日までに反對者の回答は數通到着いたして居りますが、私等は此の際ますます結束をして、この歎願條項の貫徹に協力せねばなりません。

且つて全國の女教員諸姉が團結して產前產後の休養と其の期間に於ける給料全額の支拂を要求してつひに貫徹した。

また遞信省の女子從業員がこれに倣らつて要求をし終に之を勝利に導いたことは現在の私等に執りて強い教訓を與えるものであります。

諸子は自分自身の問題を人委せにせず、少さくとも弱くとも、其の力を捧げて共に之の問題の成功する樣に勇敢に參加すべきであります。他人に獻身的努力をして貰つて懐手を仕て其の恩惠に丈け與らうとする樣な卑劣な考へを持つ者があれば夫れは諸子を裏切らうとする裏切りものです。私達は斯樣な人を默殺して私達自身の爲に團結いたしませう。

勝利の希望は今近かづきつゝあります。

全員結束せよ！　團結せよ！！

彼女たちはその後、いろいろなビラを撒いて一方仲間の婦人を勵まし、裏切り者のないやうに防ぎ、又他方輿論を喚起する事につとめつゝ會社側の回答を待つたのです。

然し、會社は專横にも、この當然すぎるほど當然の歎願をもふみにぢつて、十二月二日の回答日にも何ら答へず、それぱかりか、各支店でそれぞれの應急策を立て、威嚇して、あるひは懐柔し、殆ん

ど强制的に、各婦人たちに心にもない聲明書に印を捺させやうとして努めました。十月末大阪朝日新聞の事件で、會社は銀行の取付さわぎのやうな大打撃をうけて解約者が非常に澤山出てゐたあとの事とて、會社側では、出來るだけこの事件を秘密の内に葬り去り、この危機から脱しやうともがいてゐたのでありました。

そこで會社側のとつた態度はどんなものだつたでせうか。

八千代では實に、主謀者とみなすべき二人に、突然解雇の通知を發したのであります。爭議になれない婦人ばかりのことゝて、これで歎願書の成行きはずたずたになつてしまつたのですが、馘首された二人にしてみれば、一身を賭してもこゝまで戰つて來た以上は、あくまで全婦人外交員、否、全職業婦人の注意を喚起して、遠からず組織しなければならない職業婦人の團体とはどんなものか、又、何故團結する必要があるのかに就て理解して貰ひ、併せて、不當な解雇をうけた場合に職業婦人のとるべき處置はどんなものか、のその範を垂れるつもりで、未だ前例はないことであるけれども解雇手當も支拂はせやう、あくまで戰つて勝たねばならぬ、と考へて來たのですが、これは當前と云はねばならないでせう。

大阪の支店では結局要領をえないので、つひに上京して、直接、本店に社長を訊ねて、その不當解雇を詰り、余儀ない事情とするならば、應分の手當を要求するのである旨、强談判をしたのでありました。結局、會社側では、解雇手當などいふものは婦人外交員に出した例が曾てないことであるから、重役一個人のポケットマネーを支出して、あなたの希望に添ふやうにしやう、との事でしたが、私たちが要求するのは、決して、個人のポケットマネーではない、會社の當然支拂ふべき解雇手當である、として、とうとうこれにも成功して五ケ月分也を受取つたのである。

ローザ・ルクセンブルグの手紙



一月十五日は、我がローザ、ルクセンブルグの紀念日であります。

ローザは、全生涯をわれわれ無産階級の解散運動に捧げて、つひに、今から七年前の一月十五日に敵の魔手に斃されました。彼女の手紙は、（すでに「ローザルクサンブルグの手紙」として、邦譯されて單行本になつて出てゐます）何度かの監獄生活のうち最後の三ヶ所、二年四ケ月間に獄中から、同志カール・リーブクネヒトの妻、ソフヰー・リーブクネヒトにあて、書かれたものであります。從つてその量に於てはわずか數十通のものにしかすぎず、又、内容に於ても即興の斷片にしかすぎぬので、その手紙を通じて知ることの出來る事實は決して多くありませんが、その、いかにもうるほひの多い、靜かな心境が、あのはげしい闘爭の一生を生きたローザの而も獄中記錄として、實に驚嘆すべきものとして有名なのであります。長谷川如是閑氏は邦譯の序文に、「この書は現代の女性に是非讀

ませたいものだ」と書いて、その理由として「つまり誰れでも、ローザ・ルクセンブルグにおいて『現代の女性』を讀むことが出來る。これは『文化』と『頽廢』との渦卷の裡に踊つてゐるあの『現代の女性』とは餘りに違つた現代の女性であるが、そこに現代の生命を生かして行く女性と現代の生命を蝕ばんでゐる女性との迹が認められるのである。現代と共に生きて行かうとする女性は、たとへ性情や傾向や仕事やは異にするとも、何ほどかの度合で、ローザ・ルクセンブルグたらざるを得ないのである。力であると同時に、犠牲であるところの女性でない譯には行かないのである」と云つてられます。

吉野作造先生もこの書を讀まれて「最初に强く感じたことは、男も及ばぬ極端社會黨の闘士たるローザ・ルクセンブルグ嬢が意外にもこんな美しい情緒の持主であつたのかと云ふことである。尤も後でよく考へて見ると、それは决して意外なことではない、さういふ美しい情緒の持主であつたればこそ社會改造の本當の熱がわくのであつて、寧ろ當然のことゝ云はねばならぬのである」と云つて居られます。

私もこの書を讀んで革命的な、偉大な、力のある人間の一個の魂――それが現代に生かされたときにどういふ風に動くかと云ふことを見て可なりの興味を覺えざるを得ませんでした。

二

ローザの一生はほんとにはげしい闘爭の一生でありました。その幾多の著者はみな論難抗爭のかたまりでした。が、監獄の中の彼女の生活は、それとは似もつかない冷靜なものでありました。

彼女の手紙にかゝれてあることは、その名宛の友の身の上と、その友の夫にして同時に彼女の戰友であつたカールの身の上に關することの外は、監獄内における彼女の生活に關する感想であつて、そこに彼女の平靜なる心境が窺ばれます。その關心は、雲や空や石や

植物であり、又小鳥や牛やであります。そして、さうでないときは詩や音樂やです。

　ドイツの監獄は日本のそれのやうに、豆飯で腸をこはしたり、寒さで凍傷を受けたりせねばならぬほどヒドイところでありますまいが、それでも普通の人間にとつて、衣食住についての不自由は全然ない筈がありません。それだのに、これ等のことについて何一つ彼女の不平を聞かないのは何と云ふ不思議でせう。

　彼女は靜かに牢舍に座つてゐます。時として雲が窓から見えます。

『昨日の晩、さう九時頃、私はまた一つの麗はしい光景を見ました。私は私の長椅子から、窓硝子の上にバラ色の輝やかしい反射を認めました。空は全く灰色だつたので、それは私を驚かせました。私は窓に駈けより、魂を奪はれたやうに立ちとまりました。全く灰色な空の單調の上に、この世のものと思はれぬほどの美しいバラ色の大きな雲が、凡ての物からひとり勃然とはなれて東の方にそびえ、丁度一つの微笑のやうに見えました。知らぬ遠方からの會釋のやうに、私は自由の身になつたやうに正氣づいて、知らず知らず兩手を恍惚たる光景の方へ差しのべました。こんな色や形があれば人生は美しく生き甲斐がありますわね　………』（ウロンケ、一九一七年七月廿日）

　また彼女は、その監獄の前の小さい庭を散歩します。その庭内には敷石がならんで雜草が生えてゐるのです。

『私は壁に沿うた敷石の細い道に別を告げました。その上を私は丁度九ケ月あちこち歩きまはつたのです。私は今でも、その道にある凡ての石、また石の間に生えてゐる小さな雜草をみんなよく知つてゐます。いろいろの色彩は私をして敷石の上に興味をもたせます。靑いのや、赤いのや、綠や灰色などが……』（ウロンケ、一九一七年七月廿日）

　見よ、彼女にとつては雲もよろこびであり石もよろこびなのです。けれども、それよりも彼の女の興味を

そゝるものは、虫であり小鳥であります。彼女の手紙の全量の三分の二は、それらに關する觀察の結果と研究の進行を報告するものであると云へる位であります。

『今私がこれを書いてゐる中に、一疋の大きな蜂が部屋の中に飛び込んで來て、部屋中を低い唸り聲で以て一杯にしました。それは何と美しいことでせう。精勵と、夏の熱さと花の香りとからふるへてゐるこの豐富な者の中に、どれほど深い生命の歡喜がこもつてゐることでせう……』（ウロンケ、一七年五月十九日）

『昨日突然、遠方からほんの短いブラウマイゼ（藍色の白頭翁）から受けました。……それは最初いつも私の窓の近くにとまつて、他の鳥共と窓にやつて來ては、あのをかしな「ツイツイベー」を熱心に歌つてゐました。がそれは全くいたづらな子供の罵りのやうに聞えたほど、長く引ツ張つたものでした。私はいつでも笑つてそれに同じ通り答へ返さゞるを得ませんでした……』（ウロンケ、一七年七月廿三日）

『私の母は、サロモ王は鳥の言語がわかつたと云ふことを堅く信じてゐました。其頃私は私の十四時代と、近代式な自然科學の教養とを笠にきて、この御母さんの無邪氣さを嘲笑ひました。今私自身サロモ王のやうです。私にも鳥や動物の言語がわかります……』（同上）

『つい此頃、馬の代りに野牛をつけた、さうして（陸軍の荷物を運ぶ）一臺の馬車がやつて來ました。私はその動物を初めて近くで見ました。……（野牛の性質、ルーマニヤよりの戰利品だと云ふことの說明中略）………ソニチユカ、野牛の皮は、諺にもある通り、厚く强靭なものです。しかもそれは引き裂かれたのです。彼等は荷を下ろす際、勞れ切つて全く靜かに突立つてゐました。そして血を流した一頭は泣いた子供のやうに、その黒い顏と、やさしい黒い眼の中に一つの表情を見せてすぐ自分の前を眺めやりました。それは全く酷く罰せられて、しかも何

のために、何が故にと云ふことを知らぬ、またどうしてその苦痛と暴力とに對抗すべきかを知らぬ、子供の表情でした……私はその前に立ちました。彼は私を見つめました。私には涙が流れ落ちました。

それは彼の涙だつたのです。人はその最愛の兄弟の爲めにでも、私が私の無力の中に、この物靜かな苦惱について胸を打たれたほど心を痛めることは出來ますまい。如何に遠く、如何に到達し難く、自由な美しいルーマニアの緑の牧場が失はれたことであらう！そこで如何に太陽が輝き風が吹き、また如何に鳥の美しい聲や、牧者の佳調的な呼び聲が異つてゐたことであらう。――そしてこゝでは……』

（プレスウウ、一九一七年十二月中旬）

御らんなさい。彼女にとつては小鳥は彼女自身と種類の異つた生物でないのです。野牛は『戰爭』の重荷を負はされ戰場に死なねばならぬ兵士とは異つた種類の人類でないのです。彼女は牛と語り小鳥と歌ふのです。

三

暗い獄舍の中で五十に近い彼の女が、小鳥と語り雲と話す心情は裕かな家庭に育つた浮世を知らぬ少女のそれのやうである。けれどもこれの反面において、彼の女の理智が生き生きとしたその活動をなしてゐることは、ローザの手紙を讀むものゝ見のがすことの出來ぬ點であります。彼女にとつては、小鳥は語るべき友であるばかりでなく、科學的觀察の對象物でありました

その智識の豐富なること、またそれについて知らないことを求める心の旺なこと、獄中より一々說明をしたりそれを聞いたりすることの熱心さ、彼女はほんとに習んで倦むことを知らぬ人でありました彼の女にとつては、一たばの花は必ず女と關聯し、詩と關聯し、植物學と關聯するのです。彼女にとつてはゲーテは樂譜的に愛誦され、ロダンの彫刻の畫帖の自然心はギールスの人格と通ずるのです。そして彼女は常ににこ

やかに、常に歡喜にみちてゐます。それは決して少女の快活でなくて、達人の達觀であります。

『ソニユーシヤ……あなたはあなたのハガキの中で「なぜ凡てがさうなのでせうか」と尋ねてをられる。お前さん人生は昔から全く「さう」なのですよ。凡てはそれにきまつてゐるのです――苦しみも、あこがれも、人は常に人生をそのあるがまゝに受納れ、そして凡てを美しく、善く見出さなければなりません。私は少くともさうしてゐます。考へ出した賢こさからでなく、單純に私の性質からさうなのです。私は人生を受け納れることが唯一の正しい方法だと本能的に感じます。それで私はどんな境遇にあつても本當に幸福です。私は更に私の生活から何物をも失ひたくなければ、またそれがあつた、そしてある以上の何物をも欲しくはありません。私があなたをこの人生觀に持ち來すことが出來れば！……』

『昨日私はこんなことを考へました。自分が始終喜こばしいことであらう――何等特別の理由なしに。例へば私はこゝで薄暗い獄屋の中で、石のやうに硬い褥床の上に横臥してゐます。家の中では私の周圍に、あの墓場の靜寂が漂つてゐる、それは丁度墓場の中にゐるやうです。……そしてその時私の心臟は、恰も私が眩しい日光を浴びながら花咲く牧場を行くかのやうに、解し難い內的歡喜から動悸を打つ。そして私は、私が何か魂を奪ふやうな秘密、それは一切の惡及び悲哀を僞つて見せ、そして全く光明と幸福とに變ぜしめる、そんな秘密を知つてゐるかのやうに、闇の中で人生に對してほゝ笑みます。そしてその際、私はこのやうな歡喜の原因を求めて見ますが、何も見つからず、私は再び私自身を微笑まざるを得ません。この秘密は人生そのものに外ならないと私は信じます。人が正しく見まもりさへすれば、深夜の暗黑は天鵞絨のやうに美し柔らかです。……』（ウロンケ、一九一七年四月十九日）

『ソニューシャ、あなたは私の長い監禁に對して激怒し、そして「人間が他の人間に對して決定を與へてもいゝと云ふことがどうして起るのでせう。凡ては何のためなのでせう?」と御尋ねになる。御免なさい。然しそれを讀んだ時、私は聲をたてゝ笑ひ出さずにはゐられませんでした。……可愛いゝお前さん、內輪に見積つて約二萬年も續いてゐる人類の全文明史は、物質上の生活條件に深い根柢をもつた「人間の他の人間に對する決定」の上に基礎してゐるのです。更に非常に困難な發展のみが、ひとり之を變せしめることが出來ます。……』

これまさに唯物史觀に立つ社會及びその制度に對する眞の洞察である。そしてこの洞察あるが故に革命家の運命に對する覺悟と自負とがあるのだ。彼女にとつては科學は信仰であり、信仰は實行である。そこに羨ましいまでの落ちつきと安神とがある。即ち彼女にとつては犧牲が生の歡喜であり、自己叱咤が世界征服の努力に外ならぬのである。

『しかし忍耐と勇氣とです—私達はまだ生き、そして偉大なことを經驗するでせう。今私達は何よりも先づ如何に全舊世界が沈み行くかを目擊します。毎日一破片、新たな墜落、新たな崩壞と……しかも一等滑稽なことは、大多數の者はそれをちつとも認めず、また確かな地盤の上にさまよつてゐると信じてゐる事です……』(ブレスラウ、一八年五月十二日)

—大內兵衞氏の「ローザルクセンブルグの手紙」より——

編輯室にて

謹んで、あなたの大正十五年を祝福いたします、今年も、あなたのお力添に支へられて、一層勇敢に働いてゆくことが出來るようにと念じあげます。

×　×

本誌もこゝに第四年を迎へました。雜誌發刊よりも少し早く呱々の聲をあげたわが職業婦人社は、明けて五本の指を折かぞへる次第であります。考へてみると、いろいろな人が行き去り、集ひ來りて、少分樂しい往來であつたことが、まづ何より感慨を深からしめることでございます。私は、散じてゆく力の半分四半分をもほんとに惜しいことだと、未練深くあとをおつかけてみてゐるあきらめの惡い人間ですがさうでなくてどうしませう。

この多事多難な婦人の黎明期に於て、私たちは、私たちのあらん限りの努力をさゝげて深窓や、露路裏や、山の奧にも、海の向ふにまでも、一人でも多くの私したちと惱みを同じうする現代婦人をさがし求めて共に力をあはせて輝きの日を招來させたいと思ふ願ひで一杯になつてゐるのですもの——然し事務室の仕事のまはりに見ても、愛　者名簿のカードに就いてみても結局、ふみ留まり、新しく馳せさんじて一つ心で勵まし合つてゐる人たちはみなその人その人に與へられた生活の前に眞劒に生きてゐる人ばかり、少く共、自然に行はれる淘汰はどんどんさういふ傾向で進でゐることを貧しい私たちのもつ、たゞ一つの誇りとして喜ぶものであります。

×　×

農繁期、年度末、學年末、更衣期といふ風な、循廻に依つてちがふ忙しい期節期節に、いかにもお忙しいらしいたよりを抱くのを、私は何より嬉しく思つてゐます。私も、お恥しいほど忙しい忙しい日を明かし暮してゐるのですが、いつもみんな忙しいんだ、と、自分への云ひわけともつかず、人への勵ましともつかない獨り言を云つては、又、働きにかゝります。

さあ、病魔その他の災厄がしのび込んで來るスキがないやうに今年も忙しく元氣に働きませう。（む）

前納誌代

一部　二十五錢　郵稅五厘

半年分（郵稅共）一圓四十錢

一年分（郵稅共）二圓八十錢

送金法

誌代は必ず前金の事

送金は振替で願ひます

誌代の受取證は別に出しません。雜誌發送を以てこれに代へます

大正十四年十二月卅一日印刷納本
大正十五年一月一日發行

發行編輯兼印刷人　奧むめお
東京市外蒲田町女塚二四七

印刷所　單式印刷合資會社
東京市本鄉區元町二ノ四一
電話小石川二三九三番

發行所

東京市外蒲田町女塚二四七
職業婦人社
振替東京六四一六〇番

無産階級解放の爲めに血を流した

カール・リープクネヒトとローザ・ルクゼンブルグの紀念の日（一月十五日）近づく!! 本書によつてこの貴き犧牲を紀念せよ!!
（十二月十五日發賣）

山川菊榮著

リープクネヒトとルクセンブルグ

（珍しき寫眞三葉入）

◆四六判・八十五頁◆
◆定價卅錢送料二錢◆
◆多數御註文大割引◆

神戸市湊川町二丁目十六

發行所 上西書店

振替口座大阪七二九四〇番

大正十三年十一月二十二日 第三種郵便物認可
大正十四年十二月三十日 印刷納本
大正十五年一月一日發行（毎月一回一日發行）

婦人運動

第四巻 第一號

【定價金二十五錢】